

# メデイアとしての小説

——一八九〇年の「報知異聞浮城物語」——

栞原文和

## 一 象と獅子

矢野龍溪が『郵便報知新聞』に「報知異聞」という題名で一八九〇（明治二十三）年一月十六日から三月十九日まで六十三回にわたって連載した後に単行本<sup>(1)</sup>にまとめた「報知異聞浮城物語」の「第五十四回 騎象天満宮」（三月十日掲載）では副題のとおり浮城艦隊の統領作良義文が「日本風の衣冠束帯」を身につけ象に乗ってジャワ島の旧帝都「空軽太<sup>ソラカルタ</sup>」へ入府行進をする。なぜそのような「異常にして平生に御不似合<sup>ふにあひ</sup>なる」ことをしたのかという語り手神井清太郎の質問に対して作良は「東印度諸島

の人民は何事によらず壮大なる物に服事するの性<sup>うまれつき</sup>質あり、故に入府の行装<sup>いでたち</sup>に付ては余も亦た大に工夫を費せり、象は元と此地に産せざるを以て人民之を珍奇<sup>めづらし</sup>とす」「入府の際に我れ若し平生の如く、フロックコート洋服を着けなば此国の人民或は服装<sup>みなり</sup>上より我々を西洋人に近き者の如く思ひ傲し蘭人に代はるに又た一の西洋人種を以てするの感<sup>おもわく</sup>を懐かは其心<sup>たのし</sup>に樂まざること分明なり、依ては蘭人等と全く別種なる東洋一帝国の義人か救<sup>たすけ</sup>援<sup>すけ</sup>の為に來れるの思を為さしむるを必要とす」とその理由を語る<sup>(2)</sup>。それを聞いた神井は「先生か一挙手、一投足も亦た決して道理なき事をなさゝるに感服」するのだが、もう一点行進の中

に鉄鎖で牽かれた「馴獅子雌雄二頭」が含まれている点については特別な説明がないまま終っている。

『郵便報知新聞』に掲載された挿絵にもこの雌雄二頭の「獅子」は描かれているが、それを見ると実際のライオンよりも神社にある獅子・狛犬のイメージに近く、「衣冠束帯」と合わせて神社・「天満宮」という連想を作り出すべく獅子を行進に参加させたということが考えられる。また象と獅子は仏像・仏画においてそれぞれ普賢菩薩と文殊菩薩を背に乗せている動物であり、「印度」（正確には「東印度諸島」、すなわち現在でいう東南アジア南部ではあるが）という言葉・地域との連想による結びつきも見えてくる。

そういう近代以前から続くつながりに加えて、この奇妙な行進の参加者については「浮城物語」の主な舞台であるアジアの南の地域についてこの時代の読者が新たに持つようになったイメージからも理解することができる。たとえば福沢諭吉の「世界国尽」<sup>(3)</sup>では巻頭の「亜細亞洲」の「印度地」を説明する挿絵に「印度の人象にのる」「獅子うはぐみを喰ふ」という文を添えた象とライオンの絵二つが含まれている。「世界国尽」は明治初期の日本において海外についての情報を紹介するものとして大きな影響力を持っており、これらの絵はアジアの南の地域（「東印度諸島」）と象やライオンを結びつけるイメージを広めることになったのだろう。現在、象とライオンと言えばアフリカとの

結びつきでイメージされることが多いが<sup>(4)</sup>、戦前・戦後まもなくの少年向け読物が大きな影響力を持つようになる以前はインドの方に象・ライオンという結びつきがあり<sup>(5)</sup>、それが「浮城物語」にも流れこんだということが考えられる。

このような地理をめぐる知識やイメージの枠組みはもちろん「世界国尽」などの地理書によって伝えられ広められるものではあるが、しかしそれだけではなく（またはそれ以上に）小説などのフィクションが情報発信のメディアとして機能しているということがある。様々な分野に影響を与えたベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体 ナショナルリズムの起源と流行』<sup>(6)</sup>は「国民国家」の成立に関して新聞メディアと並んで小説が果たした役割に注目した。ただ拙論「エンサイクロペディアとしての小説——幸田露伴と「浮城物語」論争——」<sup>(7)</sup>において論じたように、それは「啓蒙」的または建設的な有用な情報だけではなく無用な情報をも含んでいる。もちろん、絶対に無用な情報というのは考えにくいのだが、情報とノイズを分ける有用性に関する基準は時代・地域・階層・集団によって決定しており限定した状況の中では明らかに無用と判断されるものが生じてくる。

この象とライオンの場面も、日本とは植生・風俗などが全く違う地域のイメージによって読者を楽しませたり登場人物の深謀遠慮を説明する場面として小説内では機能しているわけだが、

しかし海外に関する知識として見るといくらかずれたものになつていふと言わざるをえない。「浮城物語」後半の主な舞台になつてゐるジャワ島・ボルネオ島・スマトラ島などの地域について、たとえば「世界国尽」では「大洋洲」の中で解説してゐるのだが、「西洋諸国支配の地」「都て此辺の島々に住居する人は島人の種類にて風俗甚はだ陋しく、欧羅巴人の支配を受けてこれに従へり。或は山の奥に籠て独立せるものもあり」という程度の紹介しかされてゐない。海外の情報としては、「大洋洲」地域そのものよりもそこを支配し「赤道ちかき暖帯に生じて余る産物を、遠くたづさへ本国の衣食に供へ富を足し」てゐる「西洋諸国」における「地理の学問、航海の術を研がきし文明の勇と知識の功」を指摘することが中心になつてゐる。つまりそれが「世界国尽」にとつての有用な情報であることになる。「世界国尽」はその冒頭から「土地の風俗人情も処変ればしなかはる。その様々を知らざるは人のひとたる甲斐もなし」というように世界の地理についての知識の必要性を訴え、それは「欧羅巴洲」における「彼の産業の安くして彼商売の繁昌し兵備整ひ武器足りて世界に誇る太平のその源を尋るに本を務る学問の枝に咲きたる花ならん。花見て花を羨むな、本なき枝に花はなし。一身の学に急ぐこそ進歩はかどる紆路、共に辿りて西洋の道に栄る花をみん」という記述を頂点としてゐる。ただ見知らぬ地の珍しい文物だから伝えようという娯楽としての知という立場に

は立つておらず、それは本文が七五調のリズミカルな文体を選んでゐる形式的な娯楽性と好対照である。もっとも先程紹介した象と獅子についての挿絵と文字による解説のような有用ではない情報無しに「啓蒙」が難しいということもあるようだが。

「浮城物語」と同時期の海外情報を伝えるもの、たとえば「我日本太平洋中ニ兀立シ、近ク濠洲ニ面シテ陽ニ南洋諸島ヲ控ユ、故ニ南洋ノ近時ノ如キハ我国人ガ一日モ注意ヲ忽カセニス可カラザルモノアリ」と「自序」で語る志賀重昂の「南洋時事」でも現在のインドネシアにあたる地域についての情報は載つてゐない。もちろん「南洋時事」は志賀重昂が実際に戦艦筑波に乗船して「南洋」を見聞した体験に基づいてゐる以上、直接足を踏み入れてゐない地域についての情報が詳しくないのは当然とも言えるが、いわばそういう時代の情報の隙間を埋める小説として「浮城物語」が登場したと見ることができるとして

情報の発信源として小説をとらえる見方は、長い間政治的プロパガンダと結びつけてとらえられがちだった。特にプロレタリア文学内の対立や日本共産党と党员文学者との関係、いわゆる「政治と文学」という問題の立て方がその典型である。小説をそれ自体として捉える（小説を小説として読む、という言い方が用いられることが多い）のではなく思想・信条などの宣伝の道具と見なすということは反「文学」的な態度として否定的に見られがちである。その際には批判の根拠として文学の完結

性・自立性・自律性が持ち出されることになる。何かのための文学ではなく、文学はそれ自体を目的として作られ読まれるべきであるという立場である。しかし、「エンサイクロペディアとしての文学」でも指摘したように、たとえ小説を何か他の目的のためのものと見なかつたとしても、今まで知らなかつたことを知る楽しみ、考えたことがなかつたことを考える楽しみも小説を読む楽しみである以上、知らなかつたことを考えたことがなかつたことを情報として受けとめるといふ点を無視して小説を考へることはできない。その点で小説は様々な読者（「読む」メディアばかりではないが便宜的にこの言葉を使う）に影響を与えるメディアの一つであり、また他の諸メディアと連関し影響を与え合うものである。たとえば「浮城物語」を連載されてきた『郵便報知新聞』という新聞メディアの中に置いてみるとどうなるだろうか。

## 二 『郵便報知新聞』と「報知異聞」

冒頭で述べたように「浮城物語」というタイトルは単行本になつた時に新たに付されたもので『郵便報知新聞』紙上では単行本の角書きになつてゐる「報知異聞」というタイトルで連載されていた。『郵便報知新聞』では一八八六（明治十九）年十月から八九（明治二十二）年十一月まで「濼報知叢談」という総

題で矢野龍溪・森田思軒・原抱一庵の手になると推測される様々な翻訳小説を掲載し続けていた<sup>(9)</sup>。当時の翻訳小説には文学改良のための手本の他に海外の文物・出来事についての情報を広める「啓蒙」の役割があつたと考えられているが<sup>(10)</sup>、「報知叢談」を受け継ぐ形で「報知異聞」の連載の始まつたことを意識して見直すと、ヨーロッパで書かれヨーロッパやアメリカが主な舞台になつてゐるそれまでの翻訳小説とは異なる地域についての情報を発信するべく始まつた連載という意味づけも可能である。

連載の開始に当たつては事前に予告もなく、また連載開始後も紙面上で小説として特に区別されてゐるといふことはない。一月十六日の第一回に付された「緒言」では、たまたま「社員」が入手した神井清太郎という人物からの「外国郵便」が「清太郎自家身上の経歴史にして其事絶快、人をして魂飛び神遊はしむ宛然一個の好小説」である故に手を入れて「報知異聞」としてここに掲載する、という旨が語られている。このような枠組みの設定自体はこの時期に限らず小説ジャンルにおいてよく見られるものだが、紙面上に置いて見ると「報知異聞」を實際の出来事を伝えるものとして他の記事と区別できない場所に位置づけてゐることになる。実際「報知異聞」は連載開始から終了まで一貫して社説的な巻頭記事（第一回が掲載された一月十六日であれば「争点を明らかにせずして漫に争闘すること勿れ」、

最終回が掲載された三月十九日は「婦人演説討論会」の後に一面の半分を占めて掲載されている<sup>(三〇)</sup>。これは「報知叢談」が途中から一面に掲載されることが多かったのを引き継いでいるためと考えられるが、全四面（そのうちの一面は広告）からなる新聞全体の中で非常に目立つ場所を与えられ続けていることになる。

そのように形式的に紙面にとけこんでいるだけではなく、『郵便報知新聞』全体の中に「報知異聞」を置いて読み直すと、様々な他の記事との間につながりを見出すことができる。どこまで矢野龍溪や他の記事の執筆者が両者を関係づけようと思図していたのかはわからないのだが、十九世紀終盤の日本においてジャーナリズムが抱えてた問題や報道の枠組みが「報知異聞」とこれらの記事を結びつけていたわけである。

たとえば、一月二十二日掲載の「第七回 新版図」において自分たちの第一の目的地として作良統領はアフリカのマダガスカル島をあげた後、「已に馬島を略<sup>りやくゆう</sup>有せは夫より手を延て接近せる阿非利加内地を侵略せん馬島に対し阿非利加大陸より海に注ぐ散別<sup>ザムベシ</sup>なる大河あり、其長さ数百里に亘る沿河の地最も豊饒なり」と言葉が続けている。現在のモザンビークを流れる「散別<sup>ザムベシ</sup>なる大河」の名前は前日二十一日の「群小政治、葡国の騷擾<sup>さうじやう</sup>」という「ザンベシ河」流域を巡るイギリスとポルトガルの対立を紹介する巻頭記事に登場していた。「報知異聞」における現在

時は「明治十一年の頃」と「緒言」で語られているが、その当時未だ領有の定まらなかつたアフリカ東岸部が十年あまり経つた現在ヨーロッパの大国同士の争いの元となっていることがわかるようになっていく。さらに二月十四日・十五日・十七日・十八日・二十日の五日間にわたって軍艦比叡に同乗してのハワイ・サモアなどの南洋諸島を訪れた特派員による「南洋紀行」という記事が掲載され、サモアの新旧勢力それぞれと結びついたドイツとアメリカについての記述がなされている。これは直接「報知異聞」の舞台や登場する列強国とは重ならないものの、「南洋」の現状を伝えるものとして臨場感<sup>リアリティ</sup>を生み出している。

また、一月二十七日の「雑報」欄では「陸軍歩兵大佐村田経芳氏」の帰朝報告の記事の中で「軍事上殊に銃砲の精巧<sup>せいこう</sup>は近時各国競争の焼点<sup>せうてん</sup>」であり、また村田大佐が「伯林」の「クルップ製作所」を視察したことが伝えられている。この記事は「我国の海軍は仮令<sup>かいてん</sup>ひ進て諸強固と雄を争ふ程にせずとも退て本国の守衛<sup>しゅゑい</sup>に遺憾<sup>いかなん</sup>なきまでの準備<sup>じゅんび</sup>なかるへからず<sup>(三)</sup>」として列強の侵略に対抗するために軍事力の充実を訴える『郵便報知新聞』らしいものと言えるが、その前日二十六日の「報知異聞」の「第十一回 新發明」では遠征隊の戦艦に「大砲二門、皆な口径五「インチ」(五寸)のクルップ砲」が装備されていること、また化学担当である「桂氏の發明せる漸燃<sup>スローホルニンク</sup>砲を以てする時は彼の雷薬を用て五寸クルップ砲を十五度の仰角に発射<sup>はつしや</sup>し能く六千ヤ

ルド（五十町）の遠距離に達することができるとは、「最も巨大にして且つ遠距離を射るに堪ゆる世界の大砲中にはクルップ氏の百五十噸砲、及びアームストロング氏の百三十九噸砲」よりも強力であることが紹介されている。世界の最新兵器として、また登場人物が開発する新兵器の威力を伝える指標として名前があげられている「クルップ砲」に、翌日の村田大佐の記事がリアリティを与えている。

この「新發明」の回では機械兼電気担当の梨山による電氣を用いた武器についての実験も紹介されているが、電氣は「雜報」欄で新技術・未来の技術として何度も紹介されているトピックである。同じ一月二十六日には「米國に於ける電氣工業」として「電氣鐵道」「電燈」「市街電力伝送法」が紹介され、その後二月二十六日「汽車鐵道の驗測器」、同二十七日「空中旅行の電氣自転車」という記事が続いている。

矢野龍溪は連載終了後に発表した「浮城物語立案の始末」において執筆の苦心の一つとして「未だ「クルップ砲」「アームストロング砲」の形をすら詳かにせざる」ような「読者」にどのようにそれらの大砲についての「想像を引起す」ことができるか悩んだことをあげている。それは他の最新技術や新兵器や日本には存在しない様々な文物や動植物についても同様なわけだが、『郵便報知新聞』全体で読むとたとえば具体的に大砲をイメージできなかったとしてもそれらが持つ威力や社会的・国

際的な影響力などは理解できるようになっている。「報知異聞」は『郵便報知新聞』の中に置かれることで読者に一貫したテーマ・前提の元で読まれることになるし、『郵便報知新聞』は「報知異聞」を中に置くことで巻頭記事や「雜報」欄で取り扱えない情報、たとえば緊急性がない、直接現在の日本には関係がない情報を発信することが可能だったのである。

このようなメディアの中の小説、そしてメディアとしての小説という見方は他の小説に対しても通用するわけだが（実際最近はそのような小説の取り扱い方が流行している）、しかしこれだけが唯一の小説の見方ということではない。先程あげたもう一つの「小説を小説として読む」立場も小説のとらえ方として重要なものであり、どちらかの立場の一方を採るのではなく両者（もちろんこれ以外の見方があるならそれも含めて）から一つ一つの小説を捉える必要がある。しかしたとえば「浮城物語」だけではなく小説全般に関して現在そのような状態になつていないのは歴史的な経緯によるところが大きい。先程例にあげた「政治と文学」の問題以前でも、「文学」概念が更新されようとしていた近代初期において既に対立は現れていた。石橋忍月と内田魯庵が「浮城物語」を徹底的に否定した「浮城物語」論争は小説観の対立だったわけだが、そこには以上述べたようなメディアとしての小説を許容するか否かという対立も含まれていた。「浮城物語」や様々な小説をメディアとして、またメディア

の中で読み直すために、近代小説における対立の様相を見直すことにする。

### 三 「娯楽」<sup>たのしみ</sup>と「天然」「自然」

矢野龍溪は「野史小説の要は人を悦はしむるに在り」と単行本『浮城物語』の「自序」に記し<sup>(25)</sup>、その後の「浮城物語立案の始末」でも「ワルテル、スコット氏の「小説は不善ならぬ娯楽<sup>たのしみ</sup>を世人に与る者なり」という言葉を引いて自身の小説観を語っている。この読者に読まれることを前提とした小説観に対して、石橋忍月や内田魯庵が現在の読者を否定または無視して（「時人に愛好せらるゝの書は名著にあらず」（石橋忍月）<sup>(26)</sup>、「不活眼社会」（内田魯庵）<sup>(27)</sup>）、内容・描写に関する基準に立つた小説観で対抗し、「浮城物語」を全否定したのがいわゆる「浮城物語」論争である。双方の立場については以前に述べたが<sup>(28)</sup>、あらためて見てみると、この対立は小説と小説の外部の関係にかかわるものとしても読むことができる。矢野龍溪は小説をいわばメディアとして読者や外界（または他の言説）との関係でとらえているのに対して、石橋忍月や内田魯庵は小説をいわば芸術としてそれ自体で完結し外界（または他の言説）から自立したものととしてとらえている。まずは矢野龍溪の語るところを見てみよう。

読者に娯楽を与ふるは小説の正産物なり、世を矯め俗を激し、人を戒め時を諷<sup>ふう</sup>するは是れ小説の副産物なり（略）。余は是等の事に於て性来甚だ多欲なり、可成く多量の娯楽を読者に与ふると同時に又可成く多量の副産物を攫<sup>つか</sup>まんと欲す。浮城物語の立案に於けるも亦た又た然り、世人に娯楽を与ること他人の小説に劣らざるのみならず其の副産物を生ずることも亦た他人の小説より幾層倍の多量ならんことを望めり、而して日本の盛衰存亡は常に外より来るを知らしめ、遠航貿易の務めざる可らざるを知らしめ、海外の風土、人情、物産を知らしめ、現世紀の兵器は理科学の所産なるを知らしめ、理科学の貴むべきを知らしめ偉人傑士<sup>けつし</sup>の風采<sup>ふうさい</sup>を想望<sup>そうぼう</sup>せしむる等は則ち余が望む所の副産物の中に在り（略）。<sup>(29)</sup>

ここでいう「正産物」と「副産物」のどちらも読者によって読まれなければ産み出されることのないものが挙がっている。つまり「読者」「世」「俗」という小説から情報を受けとめる存在なしには小説は成り立ち得ないということ、「浮城物語立案の始末」の他の箇所でも語っている「小説は広き世人を相手と為すものなり、小説の優劣を鑑定する者は世上の読者なり」ということがここでの大前提である。また次の箇所では「浮城物語」

がまず『郵便報知新聞』というメディアの中で「報知異聞」として掲載され続けたことがその表現に与えた影響について語っている。

又新聞紙上に掲る小説は一卷の冊を為して世に出る小説と其趣を異にするを知らざる可らず。小説欄内を除く外新聞紙の本<sup>ほん</sup>色<sup>しよく</sup>として、全紙面の記事は皆騒<sup>そう</sup>々<sup>ぐ</sup>しき其日<sup>ひ</sup>々<sup>ぐ</sup>の出<sup>い</sup>来事<sup>き</sup>ならざるは無く、切<sup>き</sup>たり張<sup>は</sup>つたりの修羅場<sup>しゆらばう</sup>を現出<sup>げんしゅつ</sup>す。

此修羅場<sup>しゆらばう</sup>に隣<sup>となり</sup>て忽<sup>たち</sup>ち小説<sup>しやうせつ</sup>の別天地<sup>べつてんち</sup>を見る。一方は熱<sup>ねつ</sup>の極<sup>ごく</sup>なり、一方は静<sup>じやう</sup>の極<sup>ごく</sup>なり、随分調子<sup>てうし</sup>の合<sup>あ</sup>ひ難<sup>がた</sup>きものとす。(略)  
故<sup>ゆ</sup>に従<sup>したが</sup>来の経<sup>けい</sup>験<sup>げん</sup>に徹<sup>てつ</sup>するに結<sup>けつ</sup>構<sup>こう</sup>の大<sup>だい</sup>なる小説<sup>しやうせつ</sup>ほど其調子<sup>てうし</sup>に見<sup>み</sup>栄<sup>え</sup>あり、局<sup>きよく</sup>面<sup>めん</sup>の小<sup>せう</sup>なるものほど其調子<sup>てうし</sup>に見<sup>み</sup>栄<sup>え</sup>なし、浮<sup>う</sup>城<sup>じやう</sup>物語<sup>ものがたり</sup>も亦<sup>また</sup>た可<sup>か</sup>成<sup>じやう</sup>く新聞紙<sup>しんぶんし</sup>なると調子<sup>てうし</sup>を協<sup>か</sup>へしめんことを心懸<sup>こころか</sup>けたり。(6)

この部分では新聞の他の部分に対して小説を「別天地」という性質の違うものと見なす比喻を用いてはいるものの、全く切り離されたものとは見なしていない。「結構」の「大」、「局面」の「小」を工夫することで「調子を協<sup>か</sup>へしめ<sup>な</sup>」ることが可能なものととらえてもいるのである。実際前節で見たようにここで「調子の合<sup>あ</sup>ひ難<sup>がた</sup>きもの」と語られている「記事」と「小説」は実際は共通する情報を取り上げ連関することでひとまとまりの

新聞の紙面を作り出している。また「切<sup>き</sup>たり張<sup>は</sup>つたりの修羅場<sup>しゆらばう</sup>を現出<sup>げんしゅつ</sup>す」る「記事」の「熱<sup>ねつ</sup>」があつてこそ、たとえば「日本の盛衰存亡は常に外より来る」「遠航貿易の務めざる可らざる」などといった小説内の情報が臨場感を持つて読者に受けとめられるということも起きるのである。

それに対する石橋忍月と内田魯庵は小説の完結性・統一性の方に重点を置く見方をしている。

(略) 小説は美術的の文字たらざる可からず、「美」の約束を守らざるべからず、人間生活を写すを以て目的となさざる可からず、人と運命との間を規定する天然の法則を出さざるべからず(略)。

小説の元素材料は人に在り、小説の目的物は人に在り、小説の趣向は自然に人物の性より湧出せざる可からず、強ひて趣向を作らんが為めに人物を左右するは非なり(略)。(6)

石橋忍月にとって小説とは「人と運命との間を規定する天然の法則」に従つて「自然に」「湧出<sup>わうしゅつ</sup>」するもの、すなわち自動的に動いていくものである。たとえば作者がストーリーを進めるために登場人物を操り人形のように動かしてはいけないし、また読者を喜ばせることを目指して小説を書くのも「美」の約束を破ることになってしまう。この見方を推し進めていくと、作

者の意図や読者の期待といった小説外の様々な要素から切り離されて「美術」としての小説の条件だということになる。もちろん、「人間生活を写す」以上「人間生活」と無関係ではないだろうが、「天然の法則」に適った人間の行動が描かれていさえすれば、直接実際の人間の生きている世界と関係する必要はないことになる。

一方の内田魯庵は「浮城物語」について二度にわたり批判しているが、繰り返し言い回しも多く見られそれほど違うことを語っているわけではない。「小説の目的たる人間の運命を示す」「小説は人生の真理を詩学的に示すもの」<sup>(8)</sup>「小説は人間の運命を示すもの」<sup>(9)</sup>という小説観は固陋と思われるほどに一貫しており、矢野龍溪の「小説は不善ならぬ娯楽を世人に与る者なり」という小説観と重なり合うところがないのは前掲の拙論で述べたとおりである。さらに読者に対する不信感も徹底している。

唯君が小説の優劣を判定するのは世間の読者にありと云ふに到つては君の為に最も惜まざるを得ず。一度君地方に出で、世間の読者の如何なるかを観察すれば最大（此大は君が大にあらず）なる小説は世眼より超出したれば到底俗に容れられざるを悟らん。是れ古来より今日まで当然の事案にして試にヂスレリー氏の随筆を繙かば名篇傑作は大抵作

者の死後に顛れしを知べし。<sup>(10)</sup>

彼の言う「不活眼社会」についてここでより詳細に語っているわけだが、矢野龍溪が「世」を「矯め」るもの、「俗」を「激」する対象として語っていたのに対して、「俗」とは「大」なるものを受けいられないものと決めつけている。もちろん読者の「娯楽」を目指す立場と読者不信の立場は裏表のものとして現在まで繰り返し対立（または共犯）を続けているわけだが、ここで注目したいのは「世眼より超出し」ているという「最大」の小説とはどういうものかということである。

彼等漫に文学を論ずるもの今の小説を規模小なりと曰ふ。余も又大なりと曰はず。然れども彼等何故に小なりと曰ふか。其説く処極めて浅近にして単に脚色文章を云々するに過ぎず。（略）彼等は荐りに馬琴或はスコットの歴史的を標準として是を論ず、甚しきはヂスレリーの所謂政治小説を尊崇して最上乘の文学となす。（略）彼等は恐らく歴史は自然の変遷に生じて人間想像外なりと曰はん、然れども社会も又自然の変遷にあらずや、若し曰ふべくんば歴史は即ち社会の写真にあらずや。

坪内君曾て余に語るらく、我をしてミルトンの大観念あらしめば台処の失樂園を作らんと。斯の如くにして初めて詩

の大を語るべし。ミルトンは悪魔と天宮との戦争を歌へり。彼は宇宙の大観念を事実の上に現せし故に皮想を味ふ人も能く其大を悟るべし。然れども若し達観者の目より見れば台処の中に悪魔と天宮との戦争あるを知るべし。(略) 彼等形の大を好んで真正の大を知らざるもの恰も斯の如し。

ここでも石橋忍月が語っていたのと同様の「天然の法則」が問題となっている。人間の「社会」やその「歴史」を動かしている「自然の変遷」こそが「真正の大」であり、それを理解している「達観者」だけが正しく文学を理解することができるというのである。当然小説においてもそれが何を題材にしているかが書かれているかを(「脚色文章」)問題にするのではなく(「宇宙」でも「台処」でも何でもいい)、どれだけ「自然の変遷」に忠実に書いているかまたはどれだけ小説に「自然の変遷」を内在させてあるかが小説評価の基準であることになる。もつともそのための具体的な方法にはふれていないし、前提として「達観者」による「自然の変遷」の正しいとらえ方というものがある。それがどのようなものかわからない。ともあれ小説(さらに文学)とは(開かれていない)ものだというのがここで語られている。

以上のような否定的な批評を行ないつつも、実は石橋忍月・内田魯庵ともに「浮城物語」が持っている小説としての可能性、

雑多な知識の集成という点を認めてしまっている。

まず石橋忍月は「二主人公を除きて十数名の別格諸氏、吾人は只其姓名あるを知つて其人あるを知らず、(但し植物学士松本某のみは例外)」と語っているが、地質兼植物担当の松本棟一は浮城隊の中で最も知識欲にあふれた人物であり、戦争を間近に控え戦闘訓練の必要を語り手の神井が訴えた時にも「戦争の一度二度の勝敗は人類の智識上に大関係あるものにあらず、植物志中にて古人未発見の種類を発見するは其事、大に人類智識上の事に関す」と言つて相手にせず(第五十五回 旅団長)三月十一日掲載)、戦闘中にも「ジャバの動物志中に於て未だ會て記載せざる」「小奇禽」に夢中になり軍隊の指揮を忘れてしまう(第五十六回 接戦)三月十二日掲載)。このような松本が「例外」とされたのは彼が浮城隊の中で唯一好戦的ではないいわば文弱な人物だったためということもあるかもしれないが、彼が未知なものについての情報を得る楽しみという「浮城物語」の読み所の一つを代表しているということも関係している。その松本に注目することで石橋忍月は「浮城物語」の面白さを指摘することになってしまっている。

また一方の内田魯庵は前節で見た「浮城物語立案の始末」での予め様々な知識を持っていない読者を意識して書くことの苦心を語った部分にふれて次のように語っている。

(略) 滔々たる世間の精しからざるは唯砲銃弾薬にあらず世人の知らざるはアームストロング砲のみにあらずクルツ砲のみにあらず明珍めうちんの冑かぶとも正宗の刀も蝙蝠羽織も名古屋帯も知らざる者は知らざるなり。若し世人の晋あまねく知る物を材料とするを第一の利徳とせば余が曾て黄表紙にて読みし台所合戦など悉く台処道具を用ひしものなれば第一の利徳を知りし作ならん。又世人の知らざる物を材料とするを第一の欠損とせばベルネの月世界一周或は海底紀行など第一の欠損を甘んぜし作ならん。<sup>(5)</sup>

この批判を裏返すと、読者にとって未知な情報を含むのが小説である、と言っていることになる。さらにジュール・ヴェルヌの小説のような未知なもの、たとえば未だ実現していない技術や人間がまだ足を踏み入れている空間を描くことも小説においては可能であることまでも示してしまっている。いくら「天然の法則」「自然の変遷」を金科玉条としていても、小説がメディアとして働いてしまうということを無視しきることはできなかったわけである。

#### 四 「人種」と「進化」

前節では本論が注目するメディアとしての小説という見方と

矢野龍溪の小説観を前提として「浮城物語」論争を見てきた。ここであらためて確認しておきたいのが、メディアは必ずしも発信者の意図通りに機能するとは限らないということである。メディアが備える物質性は受信者に様々な広がりのあるメッセージを受けとめさせる可能性を持っている。「浮城物語」について言えばこれまでの読みをすべて矢野龍溪の意図に回収することはできないし、また彼の小説観が実現したものととして「浮城物語」をとらえるのも単純すぎるだろう。

またその小説観についてもたとえば「不善ならぬ娯楽たのしみ」という表現一つを取ってみても非常に曖昧であり注意が及んでいない部分が多い。「不善」の基準は時代や地域によって常に同じとは言い難く、「浮城物語」についてもたとえば「東印度諸島」の人々に対する人種差別的な記述や植民地主義・侵略主義に対する肯定的な記述、そしてそこから生み出される笑いや興奮といった「娯楽たのしみ」は現在では「不善」と見なされるものである。しかし、このようなイデオロギーや世界観は発表当時においては必ずしも「不善」と言われるものではなかった。最後に「浮城物語」という小説がどのように当時の人種や世界をめぐる他の言説と重なっていたかをあらためて見ることにする。

以前指摘したように「世界国尽」では、それぞれの「人種」が生活する風土がその「痴愚」を決めるという「白色人種」すなわち欧米人中心の人種観・価値観が冒頭で提示されており、

それは政治的なものに限らない近代初期の様々な「世界」をめぐる言説に共有されていた<sup>(3)</sup>。ただ、それは絶対に変えることのできない差としては語られず、教育の普及などの施策によって「国民」および「国家」が「進歩」「進化」することで克服できるものとされていたし、「日本人」や「日本」は「進歩」して「世界」の中で特別な役割を演じることが求められてもいた。最初の節で名前をあげた「南洋時事」の次の箇所も当時はそれほど目新しくはない（しかし未だ強い口調で提唱しなければならぬ）こととして書かれている。

印度欧羅巴人種ハ渾円球上ニ跋扈シテ其威力ヲ逞フシ、

黄人種、黒人種、銅色人種、馬來人種ハ各コレガ鼻息ヲ窺ヒ、其一事一行ニ震摺セザルハ無シ、之ヲ要スルニ白哲人種ハ優等人民ニシテ黄、黒、銅色、馬來ノ諸人種劣等人民ナリ。(略)之ヲ要言スレバ白哲人種ハ愈進暢發達シテ其人ロモ亦増殖スト雖ドモ、黄、黒、銅色、馬來ノ諸人種ハ愈陵夷退歩シテ人口モ亦減少スルモノナリ。(略)

(略)予輩日本人ハコレト競争シ、コレヲ防禦シ、以テ国旗ノ性命ヲ永遠ニ保維スルノ策ヲ講ゼザル可カラズ。其策タルヤ他ナシ。蓋シ黄色人種ヲ以テ成立スル強國ノ相賛翼連盟シテ漸ク欧米列強ト軒輊スルニアリ(略)<sup>(4)</sup>

「黄人種」である日本人が他の「黄人種」と「連盟」して「白人種」と「競争」する際の最前線こそが「南洋」であるという認識が第一節で引用した「南洋」の重要性を訴える「自序」の言葉を生み出している。ここでは「白人種」を「優等」、それ以外の「人種」を「劣等」と決めつけているが、しかし「競争」が可能であるとしている以上その優劣は決定的でゆるがないものとは見なされていないことになる。そしてこの前提は「浮城物語」の設定やストーリーの成立を可能にしているし、また遡れば「世界国尽」の以下の記述と同様の認識に立っていることになる。

当時欧羅巴は文明開化世界第一とて相違もなきことなれども、往古は矢張渾沌無智、追々開けの進むに及でも、中古は封建の世とて専ら武を重んじ、武士の威光烈しくして町人百姓の難渋せしことも多かりしが、二、三百年以前より学問の道漸く行はれ、人の生計も繁昌するに従ひ、世の人皆智を貴<sup>たつとん</sup>で力を恐れず、国の政事も自然にその辺に基きて、次第に今日の有様に至りしなり。<sup>(5)</sup>

彼の産業の安くして彼商売の繁昌し兵備整ひ武器足りて世界に誇る太平のその源を尋るに本を務<sup>つとむ</sup>る学問の枝に咲きたる花ならん。花見て花を羨むな、本なき枝に花はなし。一身<sup>ヒトリ</sup>

の学アユミに急ぐこそ進歩マハリミチはかどる紆路マハリミチ、共に辿りて西洋の道に  
栄さかゆる花をみん。(36)

現在「文明開化」の状態にある「欧羅巴」もかつては「渾沌無智」だったわけだから、他の国もまた将来は「文明開化」に到ることは不可能ではない。だから「紆路マハリミチ」に見えてもまずは一人一人が学問に取り組むしかない、という認識は近代の日本において教育・研究のみならずジャーナリズムにも共通の前提であった。そしてここで「学問」によつてもたらされるとされている「進歩アユミ」は産業・商業・軍事・植民地政策だけではなく、「文化」「芸術」「文学」に関して適用されていたということについては以前述べた(35)。そしてそれは矢野龍溪のみならずその文学上の論争相手にも共有された認識だったのである。

若しダーウキンの説をして真ならしめば、万物皆進化ならんや。人情も又必らず日に進化して昨日未だ今日に同じと断言すべからず。(略)単一なる事跡フハクトと物件マターのみを注視せる武勇者ウオーリオルたらんと欲する野蛮時代にもあるまじ又日月星辰を崇拜し雷電風雨ある毎に地に伏して哀あはれみを乞ふ迷信時代にもあるまじ、又水草すゐそうを追ふて轉移し魚鳥禽獸の跡を索ぬる漂泊時代にもあるまじ、又航海熱熾さかんになり此処こゝにも彼処かしこにも航出ふなでしてクルーソーが半生を送りし孤島ムーアが想像

のユトーピヤまでも到着せんと狂奔したる発見時代にもあるまじ。余は断じて鯉こひのぼり幟ぼりの下に嬉々かぶととして甲かぶを被りたる子供の時代は既に過去れりと曰はん。(37)

「浮城物語」が小説として古いものであり現代的な「ノーベル」と呼ぶにはふさわしくないことを示すためのレトリックとして、ここではわざわざ「野蛮時代」「迷信時代」「漂泊時代」「発見時代」という人間の「進化」の過程を追い、それによつてこれらの時代を既に遠い「過去」と見なす立場に自らを置いている。現在を人間の「進化」の結果と見なす視点はそれ自体がかつては誰も考えたことのなかった近代的な認識イデオロギであり、確かにその点で「子供の時代は既に過去」つたと言えるのかもしれない。だが、時代遅れと見える「浮城物語」もまた明らかに近代初頭における世界観イデオロギに基づき、また同様の世界観に連なつた他の言説と関係している。対立を演じる二つの立場があつてこそ一つの「時代」が成り立っているのである。

「浮城物語」や「浮城物語」論争のとらえ直しを通して矢野龍溪を石橋忍月や内田魯庵(また彼ら以後の様々な文学者)の世界観・文学観の問題点はそれぞれ明らかにできた。しかし、今述べたように対立する双方が共に近代という時代の中におり、「浮城物語」や矢野龍溪の小説観を持ち出すだけでは一つの価

値観を相対化したことにはなっても、前提としている大きな枠組みを揺るがすことにはなっていない。ここから先は「世界」「読者」「人間」「自然」「人種」「進化」といった本論のキーワードでもある言葉のリアリティを下支えしているものが何かを検討する必要があるだろう。

引用に際して旧字を新字にあらためた。

注

- (1) 報知社、一八九〇年四月。
- (2) 引用は『郵便報知新聞』復刻版（柏書房、一九九二年）による。ただし原文の左ルビを右ルビにあらためている。以後の引用も同様。
- (3) 一八六九（明治二）年。引用は『福沢諭吉全集第二巻』（岩波書店、一九五九年）による。以後の引用も同様。
- (4) 「世界国尽」の「阿非利加」の章には「獅子人しゝひとを食くらふ」という文を添えた挿絵があるし、象の挿絵は無いものの「大きな象の如し」という「ひぼぼたます」（カバ）が挿絵付きで紹介されており、アフリカとライオンや象との結びつきの提示が近代初期には無かったということではない。
- (5) 実際インドはアフリカと並ぶライオンの生息地である。
- (6) 原著一九八三年、白石さや・白石隆訳。リプロポート、一九八

七年。増補版（原著第二版）、NTT出版、一九九七年。

(7) 『近畿大学日本語日本文学』第6号、二〇〇四年。

(8) 丸善書店、一八八七（明治二十）年。引用は『志賀重昂全集第三巻』復刻版（日本図書センター、一九九五年。原刊は志賀重昂全集刊行会、一九二七年）による。以後の引用も同様。

(9) 一八八六年十月一日に「新嘉坡通信」というタイトルの記事が掲載され、その中でシンガポールに住む「ロイ、ミツチエル」というフランス人が旅人に「世界万国の奇談」を求め、この記録が同地在住の「社員矢野」の知人「ジョセーブ、クラーク」から送られてくる、という連載の枠組みが提示されている。十月二日以降小説が掲載される際には「報知新聞報知叢談」という総題が与えられた。掲載作については柳田泉『明治文学研究第五卷 明治初期翻訳文学の研究』（春秋社、一九六一年）の「I 研究篇」で紹介されている。

(10) 木村毅「巻末解題」『現代日本文学全集1 明治開化期文学集』改造社、一九三一年、柳田泉『明治文学研究第五卷 明治初期翻訳文学の研究』（前出）など。

(11) 二月十一日だけは憲法発布一周年を特集した特別な紙面構成だったために三面に掲載されている。

(12) 二月二日の「雑報」欄「海軍拡張の策如何」。

(13) 『郵便報知新聞』一八九〇年六月二十八日〜七月一日。引用は『明治文学全集15 矢野龍溪集』（筑摩書房、一九七〇年）によ

る。以後の引用も同様。

(14) 引用は『明治文学全集15 矢野龍溪集』による。

(15) 「報知異聞(矢野龍溪氏著)」「国民之友」一八九〇年四月三日。

引用は『明治文学全集15 矢野龍溪集』による。以下の引用も同様。

(16) 「浮城物語」を読む(署名は不知庵主人)『国民新聞』一八

九〇年五月八日、十六日、二十三日。引用は『明治文学全集15

矢野龍溪集』による。以後の引用も同様。

(17) 「エンサイクロペディアとしての小説」(前出)

(18) 「浮城物語立案の始末」(前出)。

(19) 同前。

(20) 「報知異聞(矢野龍溪氏著)」(前出)

(21) 「浮城物語」を読む(前出)

(22) 「龍溪居士に質す」(署名は不知庵主人)『国民新聞』一八九〇年七月十三日、十四日。引用は『明治文学全集15 矢野龍溪集』

による。以後の引用も同様。

(23) 同前。

(24) 「浮城物語」を読む(前出)。

(25) 「報知異聞(矢野龍溪氏著)」(前出)。

(26) 「龍溪居士に質す」(前出)。

(27) 「どのように文化の固有性は保証されていくか——「自然」というイデオロギー——」『国語国文研究』百号、一九九五年。

(28) 「第貳章」からの引用。

(29) 上段の「欧羅巴洲の事」からの引用。

(30) 下段の「欧羅巴洲」からの引用。第一節で既出だが、あらためて引用した。

(31) 「進化する文学——文学という生命・序——」『近畿大学日本語日本文学』第3号、二〇〇一年。

(32) 「浮城物語」を読む(前出)。